

演奏とは何か(抜粋)

演奏は演奏家のそれまで受けた教育や実体験から得た知識、方法論が無意識に基づいている。

ある時期まで、好き勝手、本能にまかせて演奏していればよかった。過去の作品も含めて、作品が生まれた時代の背景や様式、演奏習慣などを無視して、極端な個性的・表現的、色彩的に誇張したものを優先する態度→誇張したテンポルバート、表現→大芸術家と看做された。

その反動として→演奏家、聞き手の意識の変化→オリジナル志向、求められる演奏家の独自性→解釈への目覚め → 演奏とは何か

「楽譜に忠実な演奏」について

楽譜にすべて記されているわけではなく、時代や作曲家によって記譜法が異なる。当時の演奏習慣がわからない。その結果、音符の表面をなぞるだけの機械的な再現への危険性も孕んでいた。

「作品に忠実な演奏」について

作品なるものは楽譜によって指示される図式的な構成体に過ぎず、具体的な響きや運動まで規定されているわけではない。現実化の様々な可能性が示されているだけ。

作品は作曲家の手を離れて自立、独自の生命をもつ。ひとたび作品が生まれれば、作曲家といえども、作品解釈者の一人。原作者が作品のすべてを知り尽くし、従ってすべてを実現できるわけではない。

原作者以上に解釈者が、作者作品を理解することがある。原作者が本能的・無意識的に処理したものを、解釈者が別の脈絡において捉えなおし、その意味を明らかにすることができるからである。

「歴史的に忠実な演奏」について

残された楽譜だけでなく、作品が生まれた時代、どのように鳴り響いていたのか、どのように鳴り響くことが意図されていたのか。各時代、各地方独特の表現手段や表現方法があって、それを無視しては作品特有の性格が損なわれるかもしれない。

当時の楽器、演奏法により、現代の楽器、奏法では得られぬ響き、音楽のディテール、全体像の把握、均斉と統一が得られるかも知れない。

仮にすべてがうまくいって、卓越した演奏家が当時の楽器、演奏法によって、当時の人々

が聴いたであろう響きが仮に再現できたとしても。

しかし、もはや現代の楽器の音量や質を経験してしまった我々、それ以上に当時とはかけ離れた日常生活習慣、意識、知識を持ってしまった我々に、当時の人々と同じ感覚で聴くことはできない。

当時は衝撃的であったかも知れない響きが、繰り返し聴かれたり、その後の音楽における響きを経験した現代では同じ効果をもって聴かれるとは限らない。

また、それぞれの時代、社会、音楽上の訓練や教養、文化の水準や傾向、雰囲気によりさまざまである。

作品に対する自身の解釈が曖昧であったり、確信がない場合、往々にして、一応成功したと言われる演奏家の見よう見まねに陥る場合がある。

可能な限り客観的に与えられた史料に基づき、しかし、史料の盲目的崇拝に陥らず、不明な点は想像力をもって補い、しかし主観の恣意に溺れず……、こういう態度は、一応過去のそれらしいものをなぞることになるが、生き生きとした演奏から遠ざかる恐れも孕んでいる。

強弱のひとつにしても、全体の構図を考慮し、かつ前後の関係の中に位置付けることなしには、具体的な表現を決定することはできない。テンポ設定についても、細かい表情についても同様である。

演奏は、行き当たりばったり、恣意的に行われるのではなく、個々の不確定な部分に潜在的に含まれる確定性をその都度選び出すように、しかも選び出された確定性が作品の一定の諸特徴と合致するばかりでなく、一定の仕方で「調和」をつくるように、「一貫性」をもって全体を構成することになるように行われなくてはならない。

楽譜の規定のはたらきがもともと不完全で、多くの可能性があり、演奏者はその中から一つを選び具体化する。

どのように各部分が肉付けされるか、その選択は演奏者自身の意志と感性による。絶えず問い、思索し、実践していくことこそ重要である。